

生活の伝承 31

発行者 民家園のつどい
会長 柴田俊彰
発行所
福島市五老内町3番1号
福島市文化振興課内
「民家園のつどい」事務局
☎024-535-1111(内線 5373)

ざつと昔 子と親をつなぐ昔話

民家園のつどい

副会長 近野 厚子

1. はじめに

「子どものとき聞いた伝説は、体験を通して生き生きと記憶されました。児童が関係していなかったら日本の伝説はもっと早くなくなるか、面白くないものばかり多くなっていたのに違いありません」と子どもに期待をかけられるのは、柳田国男先生です。

「昔話は語り手が急速に失われています。加えて家庭でも子どもに昔話を聞かせる機会は少なくなりました」と危機感を抱き「目の前にいる人が口で語り、顔を見ながら耳で聞く事が楽しい」昔話を復活させようと活動をされているのは、小澤俊夫先生です。

技術の進歩や働き方の変化に伴い、生活様式は大きく変化してきました。昔話に触れようとすると、生の声で聞く機会は大変少なくなっています。今昔話を知るには「絵本」「テレビ」「CD」などで「読む」「見る」「聞く」という方法が殆どです。さらに「聞かなくても本を読めば分かる」「昔話は大人が聞く話ではない」という声さえあります。残念ですが生の声で聞く楽しさを知らない人が多くなり、昔話を聞く機会は狭くなってきました。

さて、改めて昔話を見てみましょう。実はこの昔話は、世界中のどの国にもあるのです。それぞれの、土地で生まれた話は、建国の由来となったり、暮らしと関わったりしながら育ってき

ました。どの国でも国が生まれた時からの話が、時代を超えて語られています。また、人々の交流によって海を渡り、山を越えて外国に伝わったり、伝わってくる外国の昔話が新しい土地に馴染んで、その国の話になったりする事もありました。この時「語り手」の多くは、生活経験の豊かな老人で「聞き手」の多くは子どもたちでした。この「口で語られ耳で聞く事が楽しい」昔話は、時代を越えて語り継がれ、私たちの心を癒し、喜びや勇気を届けてくれました。昔話は「世代を繋ぐ民衆のファンタジー」であり、次の時代まで届けたい宝ものです。今回は昔話について、柳田先生、小澤先生お二人の考え方を軸にして、伝承と子育てに果たす役割を考えてみることにします。

2. 伝承としての昔話

民俗学の中の役割

長い間国の歴史を知るために重点が置かれたのは、文書だったり文学だったり文字による記録を残したものが中心でした。けれどもこの文字による記録を残した人は、貴族・武家・豊かな町人などの知識層の人です。公文書などで一揆や災害とかかわる民衆の姿が確認できる事がありますが、日常の生活文化は見えてきません。そこで、書き言葉よりも話し言葉が多かった庶民の暮らし方や文化を、聞き取りやフィールドワークという方法で明らかにしていく必要が出てきました。

これを柳田先生は「公文書などに一揆や災害とかかわる民衆の姿は確認できたとしても、平和幸福の保持のために努力した町村の記録は無く、無歴史となる。それでは常民(民族伝承を保持している人々を指す民俗学用語)の生活文化総体は決してみえてこない」と生活文化史の解明を目的とする民

俗学には、フィールドワークによる民族資料の収集が重要な事を述べられました。そこで庶民の文化を知るための一端として、口承で受け継がれてきた昔話や伝説などに注目し、これを収集し、土地に根づいて生きる人たちの暮らしを確かめようとしています。



かつば淵

昔話誕生の時期

いつ昔話は生まれたのでしょうか。「昔」というあいまいな時代設定で始まる昔話の誕生の時期を考えた方の意見は様々ですが、主なものを上げてみました。

- ・クルト・ランケグリム
人が家庭をつくって以来、語る事をやめたことがない。
- ・柳田 国男
祭りなどでの『語りごと』の文句は、整わないものであった。しかし、調子は一定の律語であり、それが次第に形を整え面白いものになる。その『語りごと』の実質だけを信じたのが伝説となり、語り方自体の面白さをとったものが昔話であった。
- ・ブリタニカ国際大百科事典
時代を通じたコミュニケーションの中で、互いに出来事を話したいという思いがあり、聞き手は聞いた話の構造的に優れたものを、次の話し手になって語るといふ繰り返しの中で、昔話がつくられてきた。

・菊池 勲
文献を探っていけば昔話・伝説・神話の起源は一つに行き着くが、現在まで広く語り継がれている昔話は本来口伝えである。文字で残されたものではないから、最初に語られたのはいつかであったか判定しにくいものである。

昔話の伝えたい事

長い時間をかけて伝わってきた昔話には、伝えて行きたいメッセージがあります。よく言われますのが「いいことをするといいことがある」とか、「嘘をつく」と罰が当たるなどの教訓的なメッセージです。これはすぐに誰もが受け入れやすいのですが、簡単に人の気持ちを動かすことが昔話の目的ではありません。実際、教訓的な昔話は教訓に多くはないのです。「桃太郎」が軍国主義、「舌切り雀」が道德教育の目的のためにできた話であつたら、時代が変わった現代では、意味のない話になってしまったでしょう。時代をかけて受け継がれていくためには、いつの時代でも変わらない普遍的なメッセージがあります。小澤先生のお話から上げてみましょう。

(1) 人間と自然との関係

まず日本の昔話の特徴として上げられるのは、自然の力と人との交流です。自然界からいろいろな力が人間の世界へやって来ます。美しい鶴も来れば、狐も狸も来ますし「家」という人の文化へ動物が来て、結婚する事もあります。反対に人間が異郷に入って暮らしたり、姿を変えたりする事もあります。このような人間と動物や植物との関係を通じて、自然と人、文化の力関係が語られました。

※例「鶴の恩返し」「したきりすずめ」「団子と地藏」



二子塚の鶴沼

(2) 命とは何か

昔話は時代を通して変わらない「命がどうやって成り立っているか」のこの問いに、答えようとしてきました。今でこそ「みんな仲良く」のように言われますが、これまで人も動物も植物も、それぞれが懸命

に生き残ろうとして努力してきました。自然界の中で食うか食われるかのやり取りをして、その結果ようやくできたのが「共生」というバランスなのです。「争い」や「危険」から離れるだけでは、成長できません。この「命の厳しさ」を知る知恵を、伝えていきます。

※例 「カチカチ山」「イワナの怪」「沼神」「ほととぎす兄弟」

(3) 子どもが成長する姿

昔話にはよく子どもが登場します。その中で子どもや若者は旅に出て、いろいろな出来事に遭いながら成長していきます。自分の命が危なくなったり、親兄弟の「生と死」に出会ったりする事もあります。実際の人生においてもいろいろな出来事に出会いながら、子どもは成長していくでしょう。長い時間をかけたり、加速したりしながら、体も五感も伸びます。生まれて三年経つと幼児という世代、六歳になれば小学生です。「この頃すっかりしてきたねえ」といわれているのがこの時期で、この小学生までの時期がもとも昔話に触れる時期です。「いろんなことがあっても大丈夫、みんな育って大人になるよ」という、人生観や成長観を伝えてくれました。

※例 「わらしべ長者」「たにし長者」「三人兄弟」

昔話が語られてきた場所と語りの決まり

(1) 話の場所や時間

・おじいさんおばあさん・お父さんお母さんのいる囲炉裏端、寝床などのほっとする場、収穫作業場などの家内労働の場などです。

・神聖な日。大歳、正月、祭、日待ち、月待ち、出産、通夜、神々と出会うなどのハレの日、人の集まりの場などです。

・夜語り。昔話は「昼むかしは語ってはならぬ」といわれ、昼語ると不吉な事が起きるとも言われました。



(2) 語りの進め方

・語り始める前のことば

物語に入る前に先駆けて言う、前置きのことばがありました。鹿児島県大隈半島では、「むかしのことなれば、あつたかなかつた知らねども、なかつたこともあつたことにして聞いてくれ」。山形県最上地方では、「むかしむかし、あつたかなかつたか知らねども、あつたことにして聞かざばなるまい」ということばなどです。いずれも戒めの意が込められ、神語りにも通じました。

・最初に語る昔話

「話の三番叟(さんばんそう)」の意味で、短いけれども完結している笑話語られていました。話の雰囲気盛り上げ、五穀豊穡の願いも込められて「河童(かっぱ) 火やろう」が多く取り上げられたといわれています。

・語り出しのことば

福島市内では「むかし むかし」と語り始められています。県内の発句(語りはじめ)には「ざっとむかし」が多く、ほかに昭和村「ざっとむかしおんじやつたあど」「三春町「ざっとむかしあつたと ホレ」」などが上げられます。今でもこの形は守られ、集会所やサークル活動の昔話においても「むかし あるところ」で「と始まっています」。

・語り終えた時のことば

福島市内では「おしまい」「めでたし めでたし」「これっきり」などと納めています。県内の結句(終わり)の主なものとして、昭和村「富貴万福末繁盛」「ざっとむかし栄え申した」郡山「ざっとむかしさけえだど」桜枝岐村「いちさかえもうした」塙町「はやこれだけだ」などが上げられます。

※「発句」と「結句」は物語の開始と終結を明らかにする役目があります。

・話の中で入ることば

昔話が語り出されると、聞き手に対して相槌(あいづち)が要求されました。土地により決まった言葉もあります。庄内地方では「おでやれ、おでやれ」、長岡市では「さあんすけ」などです。聞き手は静かに聞くだけでなく、聞きながら応えるというコミュニケーションが重要です、語りを聞きながら相槌を打ったり頷いたりして話を盛り上げました。語りと相槌は対になっています。

・労いのことば

語り終えたらさらに語りを催促する「もしとず もしとず」。無事に収束した場合には、聞き手から「ご苦労でやした」「おもしろうござった」などという声がかかり、語り手を労いました。

昔話の広がり

(1) 伝承

伝承には、祖父母や父母が子どもたちに語って伝えて行く「家の伝承」と村の中で遊び仲間や年齢による集団、仕事場などで伝えられていく「村の伝承」があります。こうして時代を超えて繋がってきました。

(2) 伝播

一方、遠隔地から村には様々な人たちが入ってきました。職業は漆かき、桶(おけ)屋、鍛冶屋(かじや)、石臼(いしうす)屋・鋸(のこぎり)の目立(めたて)屋、木地(きじ)屋、籠(かご)売り、魚売り、菓売り、芸人、宗教者など様々です。時には外国との交流で出会った人たちもいました。このような多彩な職業や様々な訪問地の中で聞いた昔話を運び込んできました。またこれらの人は村の話を持って出ていき、他の地で村の話をする事もありました。このような広がり方を伝播と言います。



(3) 語り部

村には「語り手」とか「語りじい様・語りばあ様」などと言われる、半職業的に語りを継ぐ人がいました。ハレの日に信仰的な意味合いの話を語ったり、語り手の所に子どもが行って聞いたりしています。語り上手な人や体の不自由な人がこの役を担うことがあり、他の村との交流に出かけたり、向こうからやってきてもらって聞いたりすることもありました。

3. 子どもの成長と昔話

子どもの心を動かす昔話

(1) 昔話にはたくさんストーリーがあります。

『日本昔話大成』(関敬吾)の話数は約三四、〇〇〇〜三五、〇〇〇、話型は約七四〇。『日本昔話通観』(稲田浩二、小澤俊夫)の話数は約六〇、〇〇〇話、話型は一、二一一掲載されています。遠い昔から時代や場所を越えて語り継がれてきたたくさんのお話、人々が生きてきた喜びや楽しみ、悲しみや苦しみ、また知恵や工夫などが伝えられています。昔話を聞く事で、誰もがどの時代のどの場所の人たちとも共感し合う事ができるのでした。

(2) 語りの場は、語り手と聞き手の関係で作られます。

昔ばなしは聞き手と語り手が相互に作用します。語りが始まれば、語り手は聞き手を、聞き手は語り手を見つめます。語り手は聞き手の表情を読みながら伝え、聞き手は頷き、相槌を打ちながら聞きます。この相互作用から心地よい空間が作られていきます。語りの場は、ビデオ、テレビとは全く異なる、人同士の交流で作られていく場です。この関係作りは、いくら有名な語り手でもメディアからの語りかけでは作れません。この人との関係作りが、子どもの成長の時期に欠かせない働きかけなのです。

(3) 成長に必要な「非認知能力」を高めます。

耳で聞く言葉は、言葉の発達を早め、表現力が豊かになるといわれます。加えて、感性の深い部分を刺激して「非認知能力」と言われる力を高めるともいわれます。耳から入ってくる言葉は、強く想像力をかき立て、家族から「昔話を聞かせてもらっていた」「読み聞かせをしてもらっていた」という小学校低学年までの子どもたちは「非認知能力」が高いという統計が出ていました。

※障害保健福祉研究情報「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書」(二〇二二年)

※「非認知能力」とは生きていくうえで必要でも、数値化できない能力。粘り強さ、協調性、やり抜く力、自制心、感謝する力などの事です。

【代表的昔話】

- ・ 桃太郎
- ・ 舌切り雀
- ・ 浦島太郎
- ・ 三年寝太郎
- ・ おむすびころりん
- ・ 姥すて山
- ・ 雪女
- ・ 聞き耳頭巾
- ・ 花さかじいさん
- ・ かちかち山
- ・ 金太郎
- ・ 一寸法師
- ・ うりこ姫とあまのじやく
- ・ かぐや姫
- ・ 一休さん
- ・ 牛若丸
- ・ 猿蟹合戦
- ・ こぶとりじいさん
- ・ 力太郎
- ・ 笠地蔵
- ・ わらしべ長者
- ・ 親指太郎
- ・ その他
- ・ 鶴の恩返し



「口で語られ耳で聞く事」が楽しくなる工夫

(1) 昔話はイメージしやすいようにシンプルに語ります。

「馬方とやまんば」の最初の場面です。「馬方が馬を引いて来た」と言って、馬方と馬を登場させますが、馬方の姿や馬の色や景色は語りません。ただ馬方と馬を想像してもらいます。次にやまんばが「魚くれー」と言いながら登場しますが、大声は出しませんし「口が耳まで

裂けた」とか「恐い顔をした」などとも言いません。聞き手にやまんばを想像してもらえればよく、必要な事だけ伝え、それぞれが思い浮かべるのに任せます。

(2) 昔話での登場者は孤立的です。

「馬方とやまんば」の最初に馬方が登場し、次にやまんばが登場しました。この時登場する馬方は一人、「やまんば」も一人で登場しています。もし、馬方が複数でやってきて、やまんばもぞろぞろ出てきて「魚よこせー」と取り囲んだら、頭の中でイメージしている間に話が進んでしまいます。そこで登場するものは、はっきりイメージできる「一人」「一つ」でこれを「孤立的」と言います。

(3) あらゆるものが平面的に登場します。

「馬が足を一本取られて、なぜ走れたか」を考えてみましょう。立体の馬は足を切れば倒れますが、平面の馬ならどうでしょうか。紙で切り取った横向の馬の姿を想像してみましょう。シルエットのようなら馬ならば、脚が三本脚になっても、二本足になっても倒れません。平面の背景の上を走っていく事ができます。シルエットの質量をもたない体なので、足を切られても血を流しません。背景・物・人も平面上、平面上に登場し、退場します。

(4) 同じ場面の繰り返しがあります。

「馬方とやまんば」で、同じ場面が何度も出てきたところがありました。同じ場面は同じ言葉で語り、知っている事への安心感を引き出します。同じ言葉が数回でてきても、昔話は言葉を入れ替えません。言葉や表現を知らないのではなく、聞いてわかりやすく、落ち着いて聞くことが出来るようにするためです。

特に三回の繰り返しは多く出てきます。子どもはすでに知っている事に出会うのが好きな事を昔話は知っています。よく聞くと三回目が一番長く語られている事もわかります。そして一番重要なのが三

回目です。馬方と山姥でも、三度目は足を無くした馬が倒れました。三回目で展開するというのは、子どもの興味のリズムに合わせたストーリーの進行です。

※小澤俊夫「語りの文法」
※マックス・リュティ理論「語りの五原則」

昔話は怖い話なのか

昔話が怖いというのは誤解です。「馬方とやまんば」に、馬の脚を切った場面がありました。昔話は大げさな語りはしません、それでもこの切った場面だけ拡大して残酷だという人がいます。実際に話を聞く子どもたちは、二本足で走る馬の場面を想像して笑うのです。子どもには子どもの感じ方があります。年齢にあった感じ方を大事にしましょう。



昔話には「子どもを捨てる親」「継子いじめ」「手を切る」などの場面が出てくる事があります。実際の生活には、それ以上のものがある事に気づく前に昔ばなしを聞いている暖かい場の中で「父と母」を信頼しながら知る事が大事なのです。

心理学的な立場からは、怖い話は発達過程の中で成長に必要な事といわれています。怖い話はストーリーの展開上必要な事であり、最後に幸せになる手段としての内容なのでした。

4. 親子をつなぐ昔話にもとめられる場。

伝承的な語りの場

- ・ 囲炉裏の火を囲んだり、布団の中に入ったたりする寝る前のひととき。
- ・ 聞き手は二〜三人で家族か近所の子ども。全員が語り手と親しいという間柄の場。
- ・ 語り手と聞き手が触れ合えるぐらいの近さで聞ける場。

- ・ 語り手は自分の子どもの時にさんざん聞かされてきた話を成長してから語る場。
- ・ 聞き手は相槌を打ったり、頷いたりして、語り手との間に相互関係ができる場。

現代の語りの場の問題点

- ・ 家庭に囲炉裏や火を囲む場がなくなりま
- ・ 地域や家庭に昔話を語れる人がいなくなり「語りじい様・語りばあ様」は姿を消しました。親自身も昔ばなしをきかないまま、大人になってしまいました。
- ・ 遊びや生活が急速に変化し、メディアによる遊びが増え、人と人が遊ぶ機会が失われてきています。
- ・ 昔話に出てくる暮らし方や道具を知る人が少なくなりました。
- ・ 生の声で聞く機会が少なくなり、顔を見合わせながら聞くという、交流関係が苦手な人が増えました。

現代の語りの場に望む事

- ・ 聞き手が語り手と触れ合える小さな場が、数多くあつてほしいものです。これには、家庭が一番の場になります。親世代が昔話を好きになり、子どもに繰り返し、繰り返し、昔話を語る事を願います。きっかけ作りとしては、図書館や学習センターのお話会に足を向けるのもいいでしょう。
- ・ 語りを聞くのには、落ち着いて耳を傾けられる場を確保したいものです。静かで部屋は少し暗め、目の先に明かりや炎がある事が望ましいです。
- ・ 語り手と聞き手は向き合いながら相手の顔を見て話し、頷きながら聞くという気持ちの交流が必要です。



囲炉裏を囲む

- ・語り手は聞き手に合わせてゆったりと語り、身振りや声色は控え、自然な範囲に納めなければなりません。
- ・語り手は語りに登場する古い道具や習慣を知っておき、話をきちんと覚えて語っていく事が望まれます。

5. 昔話と民話

民話という呼び方を初めて使ったのは「島原半島民話集（一九三五年）」の中で関敬吾です。けれどもあまり広まらず、使われるようになったのは、戦後木下順二が「夕鶴（一九四〇年）」を『民話劇』として発表してからです。



民話という呼び方は、民間説話という言葉が元になっています。民間説話とは民譚ともいわれ、民衆によって口から口へと伝えられてきた話を指します。近年は「民話」という言い方が「昔話」「伝説」「世間話」の三種またはこれに「神話」「起源説話」などを含めた総称として使われることが多くなりました。また、時に「昔話」「説話」を指すこともあります。

※今回の「親と子をつなぐ昔ばなし」では、「昔話」という言葉を「伝説」や「世間話」などの分類にこだわらず、親が子に語る「昔話」の総称として使わせていただいています。

6. おむすび

親世代が昔話に触れる機会がなかった今の時代に、老人の役割を考えてみたいと思います。遠い昔から昭和の中頃までの暮らしでは、子どもと老人は身近な存在でした。老人が子どもの守をし、子どもが老人の世話をし、親世代が仕事をしているという関係が続いていたのです。その時囲炉裏端の語りは、老人が暮らしの知恵を子どもにも伝える大事な場でありました。ここで子どもは、老人から昔話だけでなく、家の仕事や人との関係や村のしきたりなどを教えられてきたのです。

民家園の創立に尽力された秋山政一先生も、昔話を聞きながら育った方でした。著書の中に、祖父母の思い出と、聞いた昔話を残されています。この話を「物語として本にしたらどうか」と勧められたことがあったそうです。けれどもお母さんの寝物語の種、ふところに眠りかけた我が子に聞かせる子守語りにしてほしいと考え、断られたそうです。昭和五十年代に書かれた本ですが、この時代すでに親と子の関係が心配になってきていました。

まったく急速な都市化や経済活動の変化で家族関係は変わってきました。核家族となつて家を形成する親世代は、就労体系が変わり忙しくなつてしまいました。加えて、虐待事件や教育機器の変化から、子育ての責任や安全管理を求められています。ゆとりがなく、悩んでいる人も多いのが現状なのです。

一方、地域や家庭で子どもに寄り添っていた老人は、老人世帯となつて、孫や子どもとの交わりの場を失つてしまいました。このことに関心を持った国は、ようやく中教審答申の中に「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」として地域でもう一度、老人と子どもが豊かな交わりを持つていく事を、強調する方針をたてました。再び老人の力が必要となり、地域や学校、家庭の中で、子育ての支援者としての役が望まれるようになりました。

ゆつたり昔話を語り、ゆつたりとした気持ちで話に耳を傾ける事で、子どもは生涯に関わる大切な表現力や調整力を育てていきます。また、語られる事で昔話の伝承にも期待が持てるのです。親と子に語らいつの間が持つるよう、民家園という伝承の場を通じて、子育て終了世代の「民家園のつどい」の会員の役割には、サポーターとして期待が大きいのと思います。

※中教審答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」（平成二十年）

地域社会の教育力向上のため、公民館における高齢者を交えた三世交代交流の実施や、各地域に継がれている子どもの遊びや文化の伝承などを勧めている。

参考資料①

昔話の伝承者は子どもです

(柳田国男 日本の伝説より)

伝説は久しく、子どもばかりを聞き手にしてきました。大人もそばで聞いているのですが、おさらいをする折がないので、子どものように長く記憶して、ずっと後になってから、また他の人に話してやるべき熱心になれません。このおさらいは、聞いた木の下で遊び、またみんなと連れ立って岩の前や淵の上池の堤をただ通っていく事でありませぬ。子どもは話が不得意だから、誰も詳しくは話しません、その都度ごとに一同前に聞いたことを思い出し、暫くは一同が同じような心持になって、互いに目を見合わせるのではありません。人が年を取ってはなしをすることが好きになり、また上手になって後で昔のことだといつて聞かせるのは、大方はこの少年頃に覚え込んだ話だけでありました。

(中略)

日本は昔から児童が神に愛される国でした。道祖も地藏もこの国に渡ってから、おいおい少年の友となったのはまったくわれわれの国風にかぶれたのです。子安姫神の美しく尊いものがなかったら、代々の児童が快活に成長して、集ってこの国を大きくすることが出来なかったら、児童が楽しんで多くの伝説を覚えてくれなかったら、人と国との因果は今よりはるかに薄かったかもしれませぬ。

参考資料②

「老いを追う」より老人と子の共存

(年寄りの歴史 畑中彰宏)

民俗学者の宮本常一は、七歳まで祖父母に育てられたという。山口県の周防大島で生まれ育った、宮本の祖父市五郎は、弘化三年(一八四六年)に大島で生まれ、昭和二年(一九二七年)にそこで死んだ。「八、九歳になるまで、私はこの祖父に抱かれて寝た。そして多くの昔話をきいたのである。はじめは童謡のようなものをきかされた。いまから考えると早物語といわれるもので、口調がよいのでおぼえやすかった」。

市五郎は常一と夜一緒に寝るだけでなく、山へも連れて行ってくれた。常一は背負い籠の中に入れて山へ行くと、石を拾って来て積み重ねたり、木の葉をとったりして、ひとり遊んだ。そしてさびしくなると「じいやア」と呼び、「おい」と返事があると安心した。常一が五、六歳になると畑の草引きをさせられるようになった。「おまえが一本ひいてくれるとわしがそれだけらくになる」。最初のうちは一畝も取るとうんざりしたが、ほめられるうれしさから、仕事に根気が出るようになった。

草取りのご褒美は、ツバナ、スイバ、イタドリ、野ブドウ、グミといった田畑の畔に野生している果実や草花だった。

常一が十歳を過ぎると、ふたりで寝ることはなくなった。それから、祖父は夜になるとひとりうたをうたっていた。それは市五郎が亡くなるまでずっと続いたのだった。

参考資料③

- ・ 柳田国男の民俗学 (岩崎敏夫)
- ・ 日本の昔話 (柳田国男)
- ・ 日本の伝説 (柳田国男)
- ・ 日本昔話通観 (同朋社)
- ・ こんにちば昔話です (小澤俊夫)
- ・ こどもにかたりを (椋の木社)
- ・ 昔話と子育て (日本民話学会)
- ・ 日本の民話辞典 (日本民話の会)
- ・ 子ども文化の現代史 (野上暁)
- ・ 昔話と子育て (日本昔話学会)
- ・ 日本の民話 (日本民話の会)
- ・ いつも見る夢 (秋山政一)
- ・ フリー百科事典『ウィキペディア』



年中行事「小正月」

「おらが民家園」はこんな素敵なんだ！講座

旧広瀬座の魅力

民家園のつどい

幹事 村川 友彦

はじめに

【現在全国に残っている国重文の芝居小屋】

- ・秋田県鹿角郡小坂町「康楽館」明治四三年 国重文
- ・香川県琴平町 旧金比羅大芝居「金丸座」国重文
- ・愛媛県喜多郡内子町 「内子座」大正五年 国重文
- ・愛知県明治村「呉服座」明治二五年 旧所在大阪府池田市 国重文

【旧福島市と周辺にあった旧芝居小屋と活動写真館】

- ・福島座 明治二四年（一八九二）芝居小屋として建築 映画館
- ・新開座 明治二五年（一八九二）芝居小屋として福島駅前建築 宮町に移転 劇場
- ・福島劇場 大正一三年（一九二四）日活映画常設館 芝居小屋に改造 昭和七年映画館
- ・大福座 大正一五年（前の国際パール）演芸常設館 昭和八年大都映画上映館 大円寺・城福寺（大福座）
- ・大正館 大正初期（福島交通ターミナル付近）サンパレス付近 活動写真館
- ・天戸座 大正一一年 庭坂湯町 地元で「志田歌劇団」を結成し浪曲劇を公演
- ・松楽座 松川町天明根に芝居小屋が松川座、大正五・六年に終了後松楽座 大正一三年に松川駅前
- ・旭座 飯坂町 明治く大正初 芝居小屋 活動写真館
- ・共楽座 飯野町境川 明治三八年（一九〇五）芝居小屋として建築 映画館



【旧広瀬座の移築】

明治二〇年に旧所在梁川町北本町の広瀬川畔に建てられた。昭和六一年八月の広瀬川氾濫を契機に拡幅工事計画され、取壊しとなるため、民家園への移築が計画、福島市民家園第二期建設整備事業として平成四年九月移築工事着工、同六年九月に完成十月に一般公開され、平成十年に国の重要文化財に指定された。

1. 旧広瀬座で行われた主な興業

①明治二〇年広瀬座柿（こけら）落しほか興業の決算書から次のよう興行が行われた。

◎歌舞伎

多賀之丞芝居昼興行 取上げ 金五二二円五九銭四厘

夜興行 取上げ 金八〇円一二銭二厘

初代尾上多賀之丞：初代元禄三年（一六九〇）に名乗り女方で上方で活躍

二代目尾上多賀之丞：幕末から明治の女形役者 二代目尾上菊次郎の門人 その後菊次郎の養子として二代目尾上多賀之丞は女房役・奥方役を得意 明治三二年没

三代目尾上多賀之丞：明治二二年生まれ 本名樋口鬼三郎 女形

六代目尾上菊五郎に見出され昭和二年尾上多賀之丞を襲名 昭和四三年人間国宝

己之助芝居坐料受取 金六七円七九銭二厘

五代目坂東養助か？…坂東三津五郎と関連か

代治郎芝居 金一四円八四銭四厘

田之助（四代澤村田之助）芝居 金四五円



三代目澤村田之助の養子 安政四年(一八五七)〜明治三二年(一八九九) 三代目は天才子役 立女形 人気役者 四代目田之助は病弱

新六芝居 金一二円

圓香芝居 金一四円三〇銭

市蔵芝居(片岡市蔵) 金二六円

◎義太夫

浄瑠璃の流派の一つ 竹本義太夫が元禄頃に創始 人形浄瑠璃と結びつく

熊谷定太郎義太夫坐料 金五円

◎角力：・独り角力か 角力生料金 金三〇円

◎演説会 黒沢演説会座料 金五〇円

②旧広瀬座の楽屋には多くの落書きがあり、そこから出演した役者名や公演内容が分かる。

◎歌舞伎役者

明治二三年 坂東橘治朗・坂東八重三郎・立花家一童・春本座

市川大二郎・市川滝太郎・市川市治郎・市川国之丞

明治二五年 中村三津世 音羽屋連

坂東八重二郎ほか 尾上時寿改め嵐冠蔵

太夫元中村雀之助・鼓取口彦輪・座鼓坂東権十郎

ほかに中村福助など多くの役者名がある。

◎自転車曲乗り・新時代劇

明治三五年 鬼城派牧野一行・流太郎事市川米太郎

◎常磐津

大正一五年 市川喜鶴弟子市川喜美次一座来る

◎新劇

昭和五年六・七・八の三日間 大入満員

昭和名優 新旧合同劇・芳賀照夫一郎・太夫元新田家
操此人出身梁川町四番地にて人気名優 広瀬操 好男
子成田重雄

2. 芝居小屋の公演内容と時代的変遷

明治期の芝居興業は歌舞伎が圧倒的な人気で江戸時代から引き継がれた。近世における芸能の主役は歌舞伎であった。歌舞伎の発生は、近世初慶長八年(一六〇三) 出雲国の巫女、阿国(おくに)を座長とする遊芸集団が京都五条の橋詰辺りやその外で「異風ナル男ノマネヲシテ」と珍奇異様な風体で舞台で躍ると一躍脚光をあびた。寛永六年(一六二九)遊女中心となり、かぶきが禁止されるが若い人の若衆かぶきが流行るが、まもなく禁止された。すると成年男子による野郎かぶきと呼ばれる男性による歌舞伎が行われるようになり、演劇として歌舞伎が確立し現在の歌舞伎が行われるようになった。一方徐々に地方へ伝播して農村歌舞伎となって各地で行われている。歌舞伎の要素には、妖艶な踊りのほか式三番など宗教的演目、和事(男女間の恋や心情)・荒事(荒武者、怪力無双のヒーロー)などからなっている。

市川團十郎は成田山新勝寺本尊不動明王を守り本尊、屋号を成田屋とし、また山伏修験的な要素の荒舞を歌舞伎に取り入れた。大見得をきる「にらみ」や手は不動明王のポーズからあみ出したといわれる。

大正期に入ると歌舞伎のほか各種の興行があり、「大正二年度広瀬座組合決算書」には、活動(活動写真・蚕業講和・奇術・浪花節・新派芝居・女剣舞・百人芸などが行われた。

昭和初期の興行には、映画・おどりなども加わり、戦後には浪曲・映画・歌劇・演劇(劇団)などが公演され「寄書帳」(『旧広瀬座移築保存工事報告書』)によると昭和二四年一月二二日より三日間次のような公演が行われた。



梅沢劇団来る 俳優名 澤村紀美男 梅澤光 梅澤忠 梅澤博 梅澤彦兵衛ほか一人 結髪岡本力 装置原豊・佐藤利彦 音調松井千代子 上演芸題 国定忠治四場 新作舞踊十景とある。

3. 旧広瀬座がつくられた背景

旧広瀬座は芝居小屋(常舞台)として建設をみる以前の興行が行われていた明治六・七年頃の公演場所は個人宅や屋敷地、寺院境内などであった。興行の種類は綾釣り人形芝居・祭文語り・人情今昔噺(落語)・軍談忠孝物語(講談)・浄瑠璃人情噺・女芝居・玉子吹矢・マムシ大蛇・浮世噺・相撲・軽業・曲芸などであった。

●明治六年四月に芝居浄瑠璃興行の県税規則が次のように出された。

一、兼而教部省ヨリ御達も有之候通、芝居浄瑠璃之類ハ専ら勸善懲悪ヲ主トシ、勤メテ淫風醜態ヲ警シメ、還而片境鄙野(ひや)之婦女子ヲシテ教化誘導之端緒トモ可致儀候間、此等之処戸長副戸長ニおいて厚可致注意事

一、相撲・芝居・寄セ・見世物等興行之節ハ、日限取決極前以可伺出事 但し 日延等も同断之事

一、芝居之場所之広狭ニ拘らず、一日金十五銭ツ、可致税納事 但し 税金ハ前納之事

一、相撲ハ右同断、一日金十銭ツ、可致事

一、寄セ・見七物等 一日又ハ夜ニ付金五銭ツ、可致税納事 但し 右同断

右之通り相定候条、若違犯之輩ハ税金江五倍之科料可申付事前書之通り小前末々迄無洩可触示者也

明治六年四月五日 福島県令 安場保和 『桑折町史』7

●明治一三年には芝居興行願が出された。

東京府浅草区カヤ丁二十七番芝居営業人 尾上多磨治外二十名
一、木戸銭 一人にて大人八銭 小人五銭
一、掛敷台 一人七銭

右之者共相雇本月十八日午前八時より午後八時迄風雨除クノ外晴天六日ノ間伊達郡梁川村字大町二丁目三番地堀江所持地ニおいて芝居興行仕度奉候 御規則之税金上納仕候間此段御聞届被成下度奉願上候已上

明治十三年九月十二日

右願人 伊藤茂左衛門 ㊦
地主 堀江 里 ㊦
戸長 中木儀左衛門 ㊦
『梁川町史』8近現代1

●当時の梁川町はシルクの町

伊達市梁川町は養蚕と桑の品種改良による苗づくり、座繰り製糸による生糸生産が江戸時代から盛んであった。養蚕飼育の技術向上のため蚕室の温度を正確に測る温度計「蚕当計」が、梁川の蚕種製造家で豪商の中村佐平治家で育った中村善右衛門が考案し、これによって蚕の飼育と温度の関係が安定し、一般の養蚕家に温暖育が普及することとなった。また秋蚕のための蚕種貯蔵方法(風穴)に成功した。

このシルク産業の町伊達市梁川にはそれによって財をなした家が多く、明治以降は仲買商が活発になって、金融機関の設置が進み、明治一一年(一八七八)九月第百老銀行が設置された。その発起人は蚕種製造販売で財を成した資産家であった。この資産家が広瀬座の建設に関わったのである。

●旧広瀬座をつくる中心になった人たち

明治二〇年広瀬座建設資金出資者

広瀬座組合の組織と資金調達 出資金額一口四五円

【内訳】

大竹宗兵衛 七口(蚕種製造人塩金融醬油・百一銀行)
中村佐平治 五口(蚕種製造人呉服太物・百一銀行)
信夫吉助 四口(生糸商呉服・百一銀行)
中村作蔵 三口(百一銀行)
小松シュン 三口
菅野五郎治 三口(蚕種製造人)
横山清次郎 二口(蚕種製造人・百一銀行)

- 大友勇蔵 二口 (生糸商)
- 田口留兵衛 二口 (蚕種製造人紙荒物)
- 阿部長兵衛 二口 (売薬煙草新聞雑誌)
- 中木直右衛門 二口 (蚕種製造人金融)
- 大竹権右衛門 二口 (蚕種製造人生糸荒物)
- 熊倉末吉 二口 (金融・百一銀行)
- 斎藤宇三郎 二口 (生糸商)
- 石井市左衛門 二口 (蚕種製造人)
- 大竹安太郎 一口 (生糸商)
- 中木孝平 一口 (蚕種製造人)
- 佐藤甚右衛門 一口 (百一銀行)
- 丹野亀之助 一口 (生糸商)
- 下山三七 一口 (蚕種製造人荒物陶器)
- 角田倉蔵 一口
- 富沢栄達 一口 (百一銀行)
- 高和安二郎 一口
- 無名 四口

●旧広瀬座の構造と芝居用具
 構造と規模は木造入母屋造り、木羽葺き、四方下屋(この部分二階建)、中央上屋部分吹抜け、楽屋便所風呂(復元付帯)で、1階が桁行二九・一五m(一六間)、梁間一六・六三m(九・〇間)、平面積四八四・七六㎡(一四四・八坪)で木戸口・下足場・升席・棧敷・はなみち・舞台・楽屋・かつらべや・便所風呂など、二階は棧敷・楽屋・小道具部屋など二三〇・九四㎡(六九・〇間)、地下奈落五四・〇八㎡(一六・一坪)で回り舞台の仕掛けがある。
 また、芝居関係資料として大道具小道具、被り物、武具、衣装、鬘と床山道具、床本など、また幟・看板・提灯など宣伝関係、煙草盆・火鉢・あんかなど観客用道具など数百点が県重要有形民俗文化財となっている。

『旧広瀬座移築保存工事報告書』福島市教育委員会

「民家園のつどい」会員随時募集中

「民家園のつどい」は、福島市民家園で年中行事を再現している団体です。一緒に年中行事の再現に参加しませんか。
 興味のある方、会の活動内容をお聞きになりたい方、入会希望の方など、お気軽に事務局までご連絡ください。

【令和元年度の主な活動内容】

- 4月
 - ・研修「べこぞうりの作り方を学ぶ」
- 5月
 - ・年中行事「端午の節句・田おこし」「田植え」「むけの朔日」
 - ・年中行事「子どもの遊び」「たなばた」
 - ・研修「養蚕」
- 7月
 - ・体験行事「昔の一日」、
 - ・研修「養蚕」「カルメ焼きの作り方」
- 8月
 - ・実演行事「糸とり・機織り」
 - ・年中行事「盆の行事」
- 9月
 - ・視察研修「伊達市保原歴史文化資料館ほか」(伊達市)
 - ・年中行事「おつきみ」「稲刈り・脱穀・収穫祭」
 - ・視察研修「増田のまちなみ、内蔵ほか」(秋田県横手市)
 - ・研修「糸とり」
- 10月
 - ・年中行事「子ども秋祭り」
- 12月
 - ・体験行事「わら細工」
- 1月
 - ・研修「わら細工」
 - ・年中行事「小正月」
- 2月
 - ・年中行事「節分」
- 3月
 - ・年中行事「桃の節句」
- その他
 - ・「おらが民家園」はこんな素敵なんだ！講座(全5回)

【事務局】福島市 文化振興課 文化財係 担当：菊池
 ☎(024)535-1111(内線5373)